



ΑΛΕΞΑΝΔΡΕΙΑ
no.47

特集

一万円で 何をかう？

選ぶのはあなたです。



「買い時は今」 篠崎美生子



「BOOK HUNTER LINEUP！」

ブックハンターたちは
なにを買ったか？



選選書ツアーには行ってきました！！

佐野友香

近藤里夏

「蔵書点検のアルバイト」

高橋桃子 森田瑞 安田杏香

「Trio！で読書」

3冊セットでいかがですか？

喜田安哲

特集「1万円で何をかう？」

買い時は今

—— 1万円で何をかう？ ——

篠崎美生子 日本語日本文化学科

商売柄、毎月数万円単位で本を買う習慣が身につけてしまいました。仕事のためのものであるせいか、お金のかかる買い物の割にうきうきしないのが残念です。クリック1つで目当てのものが送られてくるシステムも、喜びの感覚を麻痺させるのかもしれませんが、でも、たまに大きな書店で本の背中を眺めていると、恍惚とした幸せの感覚が蘇ってきます。

地方都市の公立高校に通っていた当時の私は、時々厳しい校則に背いて本屋に寄り道し、本の棚をうっとり見上げ、迷ったあげくに1冊の文庫本を買って帰るのを楽しみにしていました。狭い通路の両側の天井近くまでぎっしり詰まった本を見上げながら、まだ知らない小説の言葉たちに呼ばれているような、本に吸い込まれていくような感覚に包まれたのを覚えています。

とくに忘れられないのは、高校3年の冬、東京の私立大学から推薦入試合格の通知が来た日のことです。国語の先生に「お祝いだ。ちょっとつきあいなさい。」と声をかけられました。先生は、厳しい代わりに学問においてブレのないハンサムウーマンで、私の憧れの存在でもありました。文学部で日本文学を専攻しようと思ったのには、この先生の影響もあったかもしれません。

さて先生に着いていった先は、なんと私がこっそり寄り道をしていたあの本屋でした。先生は、あの天井近くまで文庫本の詰まった棚の前に私を連れて行くと、こう言われました。「君はこれから日本近代文学をやるんだろう。それならまず古典を読みなさい。外国文学を読みなさい。それから日本近代文学を読みなさい。基礎の教養を馬鹿にしては先に進めないんだから。」



特集「1万円で何を買う？」

そして先生は、文庫本を1冊ずつ指さしながら、これはどの時代のどんな物語でと、丁寧に説明してくださいました。先生の解説は授業の時以上に面白く、本のタイトルとともにその時の私の心に食い込んでくるような気がしました。1時間近くも私たちはそこにいたでしょうか。ルーズリーフにメモした本のタイトルも、50冊近くになっていました。

あのころは文庫本も今より安かったですが、お勧めの本を全部買ったなら1万円ぐらいにはなっていたことでしょう。それは当時の私にはおいそれとは用立てられないお金でした。それでも忘れないうちにみな買ってあげばよかったと、今つくづく思うのです。先生のお勧めの本のうち、確かに買ったことを覚えているのは柳田国男『遠野物語』（新潮文庫）だけ、肝心のルーズリーフも、引越しを重ねるうちになくしてしまいました。

あの日、本屋の帰りに喫茶店でパフェをご馳走になりました。そのとき、興奮気味でかえって口のきけないようになっていた私に先生が、「私もね、行きたかったんだ、東京に。」とつぶやくように言われたのを、32年ぶりにふと思い出しました。

先生の夢と私の思い出を織り交ぜて、勧めていただいた本の中でまがりなりにも読んだものの名前を書いておきましょう。『古事記』『竹取物語』『土佐日記』『源氏物語』『今昔物語集』『堤中納言物語』『問はずがたり』『平家物語』『御伽草子』（以上岩波文庫黄帯）、魯迅『阿Q正伝』、ソポクレス『オイディプス王』、シェークスピア『ヴェニスの商人』、バルザック『谷間の百合』、ドストエフスキー『罪と罰』（以上岩波文庫赤帯）。

このへんで、もう1万円になりますね。

